

# 温暖化・気候変動・環境崩壊、そして……？

## 地球環境問題の何が『問題』なのか

佐々木進市（環境カウンセラー全国連合会）

### はじめに

#### ■「環境鎖国」から「環境開国」の時代へ

わが国が江戸時代を通じて国策としてきた鎖国政策を廃止させ、世界の主要国との通商関係締結（開国）を迫ったのがアメリカ合衆国海軍東インド艦隊マシュー・ペリー提督の「黒船（ブラックシップ）」（1853（嘉永6）年）であった。いま、形を変えた開国要求が世界各国に突きつけられているということができる。それは地球環境問題解決への参加、たとえば京都議定書あるいはポスト京都議定書への参加といった地球環境問題解決に関する国際条約の実行という「開国」である。

ペリー提督の黒船で世界の大都市江戸は「たった四杯で夜も寝られず」という大騒ぎになった。では、地球環境問題、たとえば主要な温室効果ガスである二酸化炭素という黒船の場合はどうだろう。大気中の二酸化炭素の濃度（2005（平成17）年）は「たった」0.0379%（379ppm）である（温室効果ガス世界資料センター）。人類や生物の快適な生存環境はこのような「たった」0.0379%という大気の究極のブレンド力によって支えられていることをわすれてはならない。このたった0.0379%の二酸化炭素が、さらにその総量の「たった数%」増加し続けているだけで（2001（平成13）年は371ppmだった）、人類（もちろん他の生物も）の生存をおびやかすようになると、「夜も寝られない？」大騒ぎになっているのが現代なのである。

本当の大騒ぎはこれから起きるのだ。産業革命以前の二酸化炭素濃度の平均値は0.028%（280ppm）であり、最悪のシナリオでは21世紀末のそれは0.08%（800ppm）を超えると予測されているのだから。

環境問題、特に大気中に放出される二酸化炭素は地

球上を「千の風」となってかけめぐり、地上の人為的な国境線に関係なく、地球規模で影響をもたらすようになった。国境を越えてお互いに影響を与え合い、受け合う関係ができてしまったのである。ここにおいて、特定の一国の「環境鎖国」はあり得ない時代になった。こうして地球環境問題は「現代の黒船」になったのである。この黒船の到来によって、環境問題は自動的に全世界の人類が協力して立ち向かうべき国際的な共通課題となった。われわれは「環境開国」という第二の開国時代に入ったのである。

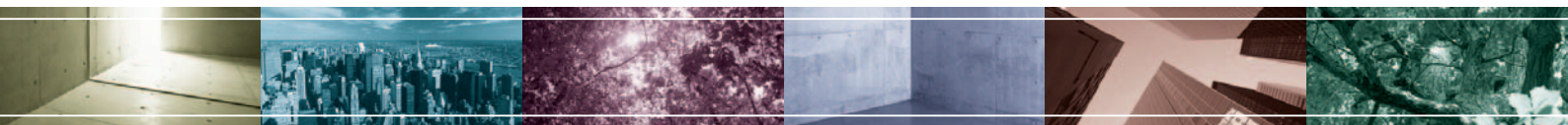
#### ■環境立国宣言の元祖、熊沢蕃山

幕末の開国の後には明治の富国強兵政策が続いた。現代の「環境開国」の後には「環境立国政策」が続かなければならない。

「山川は国の本（もと）也」とは、勝海舟をして「儒服を着た英雄」と言わしめた江戸時代の儒学者、熊沢蕃山の有名な言葉である（大学或問）。平たくいえば「国家運営の基本は自然が豊かであることだ」という意味である。ちょっとひねってさかさまに言えば「自然を大切にしないと国家は衰亡するぞ」ということである。このように、日本で初めて「環境立国宣言」を行ったのは熊沢蕃山であることを忘れてはならない（本当は「世界で」といいたいところであるが、ここでは遠慮しておく）。

熊沢蕃山（いまの岡山県で名をなし、茨城県で没）の時代は江戸時代中期（1619（元和5）年～1691（元禄4）年）である。おおげさにいえば、人類が、自らの活動が自然に悪い影響をあたえ、その結果が災いとなって再び自らに帰ってくることを明確に認識できるようになるまでには、熊沢蕃山の出現まで待たなければならなかったのである。

おなじ山川でも、さらに古いところで、杜甫作「春



望」(八世紀)の「国敗れて山河在り」という有名な一節を思い出す方も多いであろう。この場合は、人間界で何があっても山河、つまり自然だけは「不滅」であるという楽観論が前提になっている。

杜甫よりさらに古い列子の「杞憂」も、空が落ちてきたりすることはないことを引き合いに出して、無用の心配をするなという意味の警句として使用されてきた。もちろん、古代においても国家衰亡の元となるような致命的な環境破壊はあった。しかし、この時代は、全体として人間の自然環境にあたるダメージを深刻に考えることがなかったから、こんな楽観論が通用したのである。「山川は国の本(もと)」ではなかったのである。

しかし、現代においては、毎年本州の半分程度の面積の森林が地球上から消滅し(1990(平成2)年から1995(平成7)年の5年間の平均)、大河(アマゾン流域の一部など)や大湖沼(アフリカのチャド湖など)が干上がり、落ちてはこないが空ではハリケーンやサイクロン、台風が暴れまわり、ぽっかりと開いたオゾンホールからは皮膚がんの原因になる紫外線が大量に

降り注いでいる(オーストラリアの一部など)。海面が上昇して、海に沈んでしまう国家(ツバルなど)や地域(バングラデシュの一部など)もでてくるようになった。杞憂が杞憂でなくなった時代が現代である。後述するIPCC報告書は、「杞憂」ということばを地球上のあらゆる辞書から抹消するための最強の科学的根拠となった。

熊沢蕃山が現代に生きていたらこういうであろう。「山川は地球のもとなり」と。

## 1.世界では「気候変動」、 日本では「温暖化」のなぜ

大気の温度が上がり続け地球規模で気候が変わり、人類の生存基盤が破壊される可能性が高まっていることについて、自身や家族も含めた人類の未来を心配されている読者も多いであろう。

この心配を取り除くためには温暖化を止めればよいという発想が巷にあふれている。

17世紀の哲学者バールーフ・デ・スピノザ(オランダ)が述べているように、「結果には原因がある」。温暖化は結果なのだから、その原因である二酸化炭素を代表とする温室効果ガスの排出を削減すれば、結果としての温暖化は止められるはずだ。と、誰もが信じて疑わないかのようにみえる。この考えは、まちがいである。

たとえ、この一瞬に世界中の温室効果ガスの排出を全て停止したとしても、すでに大気中に排出された温室効果ガスの影響によって、自動的に大気の温度は上昇するのである。つまり、どうしても温暖化は止められないのである。「ストップ温暖化!」が温暖化自体をストップしようという意味で用いられている限り、それは科学の裏づけを欠いた標語であると言わざるを得ない。我々は温暖化の進行という現実を受け入れなければならないのだ。

「結果には原因がある」ということを発見したのはスピノザに限らない。紀元前の仏教徒はすでに「因果応報」を教義の柱にしていた。彼らは、原因がなくなれば結果は生じないことを繰り返し説いている。

我々が生じないようにしたい結果は果たして「温暖化」なのであろうか。これもまちがいである。世界の常識では温暖化は「原因」なのである。